

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2490100035		
法人名	社会福祉法人 自立共生会		
事業所名	グループホーム くわなの宿		
所在地	桑名市萱町37番地		
自己評価作成日	令和3年9月20日	評価結果市町提出日	令和3年11月17日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&JizyosvoCd=2490100035-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和 3 年 10 月 12 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

桑名市の中でも、旧東海道に面した古い町並みの中にあり、地域行事や祭事、地域の清掃などの自治会活動に積極的に参加している。石取祭りでは試楽、本楽ともに地域の方と協力し、参加者・観光客共に喜んでいただけるように働きかけている。利用者様が、地域の住民の一員としてまたその人らしい生活を送って頂けるように支援している。

新型コロナウイルス感染拡大防止として、現在は併設の放課後児童クラブ「くわなっ子」との直接の交流は出来ていないが、それ以前には学童・職員・利用者様との3世代4世代の交流を行っていた。感染に一定の目途がついた際には、再度交流を再開し利用者様の役割や子どもたちへのお手本を示して頂ける機会を作っていくためにも、学童指導員とグループホーム職員との交流を欠かさないようにしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

2020年から世界的に蔓延している新型コロナウイルス感染症防止のため、事業所は行動等の制限が強いられ現在も続いている。桑名市の伝統行事の石取祭りの中止、花火大会の中止など2年間取りやめになって残念な思いは利用者からも聞かれる。その中で、同一敷地内で併設されている学童保育所と手作りの作品を交換したり子供たちからメッセージが届くなど出来る交流は職員の支援で継続し、顔をあわせずとも子供たちの賑やかな声が聞こえて利用者の和みでもある。地域の清掃作業への参加をし、散歩がてらの町内見守りパトロールは続いている。また、事業所は旧東海道筋にあり、近辺には寺院が数多くあり、季節折々の花見などが出来る環境である。母体が医療法人で訪問診療、訪問看護など医療連携が確立して、安心できる体制である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入社時の新人研修、グループ内研修、日々の業務の中で法人理念の「お年寄りの底力を活かす」を管理者・職員が確認し合い、実践に繋げている。	法人理念「お年寄りの底力を活かす」から、さらに6つの項目にわけて理念が作られている。利用者にあつた出来ること(底力)を見出し、役割を持って張り合いのある生活を送る支援に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	開設以来、自治会に参加しており、地域住民の一員として、清掃活動、夜間パトロール、行事、祭りに参加している。	コロナ禍の前は、地域とのつきあいは積極的に行い、大切にしてきたが、コロナ禍のなかでは密を避けることが求められて、すべてが出来なくなった。しかし、併設の学童保育所と職員が連携し何らかの形で交流が出来るよう工夫をしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域行事への参加の際、利用者様にも一緒に参加していただき、地域の方との交流を持っていただく様にしている。また、学童の子どもを預かることで、地域の方に認知症の理解や支援の方法を発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議には、桑名市介護高齢課や桑名市南部地域包括支援センター、民生児童委員の方に参加していただき、サービス向上に努めている。昨年より、新型コロナウイルス感染拡大予防に伴い、電話と書面にての開催となっている。	コロナ禍のため運営推進会議は書面の議事録をもって代用としている。	議事録は分かりやすく参考になると思われるので意見者を明記し、全家族への送付が望まれる。再開後は、出来るだけ家族の参加を得られるよう期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の際に、利用者様の健康状態や暮らしの様子を伝えるとともに、書面報告となっているため今までよりも、詳しく具体的に伝えられる書面とし、情報提供をしている。疑問については、市に相談するようになっている。	市の担当者へは報告書の提出などで出向いて話をして連携をとっている。コロナ禍で連携相談も行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の定義を掲示し、また、その研修を行うようにしている。身体拘束をしないケアを職員全員が実践し、万が一そのようなケアが必要となった場合、記録に残し少しでも無くせるように討議することになっている。	法人でeラーニングを使って研修が実施されている。職員がスマホにダウンロードをして勉強をして、報告書を提出している。拘束についての勉強会、適正委員会、研修は実施している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止の研修に参加したり、資料を配布し、虐待防止に向けた取り組みを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	グループ内で地域福祉権利擁護事業や成年後見制度についての研修会を開いたり、資料を配布したりして周知し、活用できるように支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、あらかじめ日時を決め十分な時間を取り、説明ができるように努めている。その際には、利用者や家族が不安な点や疑問点を尋ねやすい和やかな雰囲気を作るよう努めている。改定などについては、家族会や書面にて説明させていただき同意を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	本来、年に一度家族総会を行っているが、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、開催出来ていない。このため、来所頂いた際にご家族様に直接うかがうようにしている。苦情相談については、担当者を置き、事業所内にご意見箱を置くようにしている。	家族会があり、年に1回家族会総会を実施していたが、昨年からコロナ禍のため中止にしている。面会は制限をして玄関先でと断っている。毎月、家族へたよりを出して、それぞれ個別の写真入りで送付し様子を知らせている。オンライン面会もできる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の意見や提案が運営に反映できるよう、日頃から話しやすい雰囲気づくりに努めている。また、月報や気づきシートなどで、改善報告や提案を受け付けている。	気づきシートを使って意見や提案が出せる。コロナ禍で外出機会が少ないので、食べるもので季節感も味わえるようにと職員から提案があり、工夫を凝らしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格等級定義をもとに、各自の半期ごとの成果や課題について、面談を行い、それぞれの職員のステップアップを支援している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修に加え、認知症介護実践者研修などをはじめとする、外部の研修などを職員のキャリアや能力に応じた研修参加を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	三重県地域密着型サービス協議会に参加し、他施設とのネットワーク作りを図っている。また、管理者や職員が各種外部研修に参加することで、同業者と交流する機会を作ってサービスの質の向上に取り組んでいる。現在はオンライン研修が中心。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期の段階から、本人の気持ちに耳を傾け、困っていることや不安なこと、嬉しいことや嫌なことなどを職員全員で把握し、本人が安心できる環境、信頼関係を作れるように努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時の面談時から、家族にとって不安に感じる事、困っていることや要望等に耳を傾け本人・家族とともに支えていける関係を築けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	最初の面談時からニーズに合わせた支援をカンファレンスや申し送り等で検討し、提供できるように努めている。また、月1回、グループ内でサービス調整会議を開いており、適正なサービスが受けられるよう調整している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者の生活歴や状態をアセスメントし、個々にあった役割を教えてもらったり、町の慣習や歴史を話してもらったりしながら、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月の様子を「くわなの宿たより」や来訪時などでお伝えすることで、家族との関係を築けるよう努めている。コロナ禍で、面会等ができないため、半月に一回、普段の様子を収めた写真を6～8枚ほどお送りし、またご家族様からの希望をお伺いするようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	居室には使い慣れた生活用品や大事な人の写真を飾ったり、入居時に馴染みの品を持ってきてもらえるようお願いしている。また、利用者や馴染みの方には、コロナ禍であるため、面会はお断りしているが、電話やお手紙等で関係が切れることのない様に支援している。	馴染みの方の訪問は現在断っている。また、外出も思うようにできないため、バーチャルで楽しめるようユーチューブを利用して動画配信で楽しんでいる。友人から電話があったり手紙がくる方もあり、繋ぐ支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が良い関係を保てるように、個々の状態、相性を見ながら席の配置をしたり、生活リハや日常の生活・行事を共に取り組むことでお互いに感謝されるような関係づくりに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院などにより退居された後もコミュニケーションの維持に努め、必要に応じて本人、家族の状態や今後のサービス利用における相談や支援を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人のさりげない言葉や希望を聞き流さない様、また、一人一人の思いや希望を聞かせていただけるような話しやすい雰囲気づくりに努めている。	傾聴に努めている。入浴時や居室などで職員と1対1になった時に本音や思いが話される。また表情や反応で読み取ることもある。聞いたことは申し送りノートや個人記録に書いて職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時の面談を中心に、家族やケアマネジャーからも今までの介護保険のサービス利用状況、その際の本人の気持ちや環境について耳を傾け、本人・家族と共に支えていける関係づくりを築けるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人、家族、担当ケアマネジャーを通して、今までの暮らしぶり、趣味や特技などを伺い、センター方式のシートの使用やその閲覧を通して、生活歴の把握や本人が大切に思っているものを把握するように努めている。また、趣味や特技などは出来るだけ続けてもらえるよう働きかけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のカンファレンスでスタッフが利用者の現状と課題を事前に提出し、参加可能な家族も含め、ケアの見直しや気づきなどを話し合い、それをもとに、現状に応じた介護計画の作成に努めている。	月に一回カンファレンスが開かれている。その前に利用者についての事前シートが職員に配られ検討をしている。アセスメントはその都度行い、介護計画書が作成される。毎月職員がモニタリングをして、そのまどめを6か月ごとに介護支援専門員が実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録・業務日誌、申し送りノートなどを通してスタッフでケアの工夫、効果を共有している。また、担当制をもうけ、モニタリングを行い、介護計画に実践状況や見直しの必要性についてカンファレンスや日々の申し送りで話し合っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の状態に応じ、必要な物品を購入している。月に4~5回の医師の訪問診療の他、必要時には提携医療機関への受診を行っている。併設している学童との子どもの交流、グループ内の行事への参加等、柔軟な支援を目指しているが、昨年より新型コロナウイルスのため中止になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	自治会の公園清掃や、地域の寺社の祭りへの参加等、地域の中で役割を担いながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	週に1回、主治医の脳神経外科医、整形外科医、消化器内科の訪問診療を実施している。歯科、眼科、皮膚科などには必要時に受診の支援を行っている。初診に関しては、主治医に紹介状を依頼し、受診時に持参している。	母体が医療法人で市内にあり、専門医による週1回訪問診療、訪問看護ステーションの看護師が週1回バイタルチェックをして健康管理をしている。24時間対応が可能であり、医療との連携体制はできている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携をしているウエルネス医療クリニックの看護師に、日常的に健康状態の電話相談ができ、また週に1回健康チェックに来てもらっている。施設にも看護師が週4日勤務しており、利用者が看護を受けられるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には必要な情報を医療機関に伝え、連携をしている。また、本人家族の希望を聞き、早期に退院できるよう、医療機関との情報交換・相談に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合については、毎年、家族からアンケートを取り、意向を伺っている。利用者の状態変化に伴い、本人、家族、医師と連絡相談しながら支援を行っている。常時医療的管理下での支援が必要な場合は協力医療機関と連絡をとって、本人、家族、医師と共にその後の方針を話合っている。情報と方針は職員間で共有し、支援に取り組んでいる。	利用開始時に看取りに関する指針を明示し、説明を行っている。さらに「緊急時、状態が悪化した場合」として家族へアンケートを取り、意向を把握している。悪化が認められたら、主治医・家族と話し合い、母体の医療機関などへの入院等、利用者にとって最善の方法を支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年グループ内研修で心肺蘇生、緊急時対応訓練を行っている。新人を中心に、施設でも避難訓練を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署に来てもらい、利用者・地域の人と共に消防避難訓練を行っている。また、職員が桑名市の緊急メールを登録し、随時、情報を入手するようにしている。事業所の屋上を町内の緊急避難の場所に提供したり、近隣の寺院や住民への協力要請をしている。	毎月自主防災訓練を実施している。消防署の立ち合いは年に1回行っている。市の消防署とは距離的に近く心強い。コロナ禍になり、看護師によるガウンテクニックを実施した。建物が3階建て、備蓄も非常食等々用意している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉がけや対応に関しては、勉強会や研修会を開いたり、資料を通して利用者の誇りやプライバシー保護の意識を持てるようにしている。記録に関しては、イニシャルを使用し人物の特定がしにくいように心がけている。	昨年12月、ベトナムから技能実習生(女子)を受け入れ、教育実習を行うにあたり改めてマナー、言葉遣い等々職員自身の振り返りになったと実感している。改めて利用者に尊厳を持った接し方、プライバシーに配慮した介護に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の思いや、今後の希望について表現し易いように傾聴する姿勢を持ち、また、ふだんから話しやすい関係を築くことを目指している。また、利用者の希望が現実に向かうようにカンファレンスで話し合ったり、申し送りノート等で情報を共有するように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	どの様に過ごされていたのか、声掛けを通して一人一人の思いをお聞きするようになり、意思決定の尊重に努めている。また、体調を考慮しその人なりのペースを大切に支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2か月に一度、訪問理容に来てもらっており、本人の希望をお聞きしている。また、服装などではできるだけ本人と相談して選ぶように支援しており、食事会等の外出時にはお化粧などのおしゃれをして外出できるように支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者、職員と一緒に楽しみながら調理やおやつ作りをするようにしている。食材切り、配膳、テーブル拭き、食後の片付けなど利用者の能力に応じた力を発揮していただいている。	週4日、業者によるレトルト食品を利用している。ホームで作る時は、利用者の希望を取り入れた献立もあり、前庭の家庭菜園で収穫した野菜が食卓に上がる。近所から野菜の差し入れもある。食材はネットスーパーから取り寄せている。ホットプレートはおやつ作りにも活用している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士の立てた献立に基づくメニューや、食品会社の食材を導入している。食事の形態や水分補給については、カンファレンスで話し合ったり、協力医療機関の医師と相談しながら、それぞれの方の状態に応じ、必要な栄養・水分摂取が出来るように支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食前の嚥下体操の他、声掛けや誘導により、一人一人の状態や力に応じた歯磨き、義歯洗浄等の口腔ケアをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄の状況、パターンを把握し、職員間でカンファレンス、毎日の申し送りなどを通して、一人一人に合わせて支援を送っている。出来るだけトイレで排泄してもらえるように声掛け、誘導を行い自立に向けた支援をしている。	布パンツの方が3名、リハビリパンツの利用者が6名あり、オムツの方はいない。全員がトイレでの排泄をして、排泄の自立支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ブリストルスケールに基づく排便チェック表を活用し、一人一人の利用者・排便パターンを把握している。個々に応じた運動や、冷たい牛乳を飲んで頂いたりして、自然な排便に向け支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	同性介助を望まれる方には、入浴介助を交代したり、出来るだけ本人の気持ちを尊重し、気持ちよく入浴していただけるように努めている。また入浴したい時間を把握し、出来るだけ希望に沿うように支援している。	入浴は週3日に1回、1日2～3人が午前中に入浴している。全員が湯舟に入ってゆったりした入浴タイムになっている。職員と1対1になり、会話も弾んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の状態に合わせて、居室やリクライニングチェアなどへ誘導し、休んで頂けるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情を個々に保存し、いつでも確認できるように努めている。服薬の支援や症状の変化については連携医療機関の医師、看護師や提携薬局の薬剤師に連絡、相談し適切な服薬支援に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	センター方式を活用し、生活歴や馴染みの物などの把握に努め、日々の生活に反映できるように心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	できるだけ希望に沿えるように努め、天気の良い日には散歩や外気浴などの支援を行っている。ご家族様との会食等は、コロナ禍では行っていない。	コロナ禍の中、外出支援は以前と同じようにはできないが、ホームの前にベンチを置いて外気に触れる日光浴を支援している。周辺は寺社が至る所に所在し、お参りをかねて花見をしたり、散歩がてら防犯パトロールを継続している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理については、ご家族様・事業所が行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を希望される場合には、能力に応じて職員が電話をし、子機をお渡ししてお話して貰うように支援している。携帯をお持ちの方は、時間帯などに気をつけながら、番号の確認などを支援させていただいている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間では、TVの音量や室温、光などは気をつけて設定している。希望時には、安心してお過ごしいただけるよう対応している。温度計・湿度計を置き、適切な環境を作るよう心がけている。	今回はコロナ禍の中で共有空間場所へは入ることができなかったが、玄関越しにリビングに集まっている利用者が垣間見え、壁に利用者の作品が飾られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用スペースにはソファやリクライニングチェアが設置してあり、仲の良い利用者同士が過ごせる状態にしてある。居心地の良いところへ移動して使用する事も可能であり、それぞれ思い思いの場所で過ごせるように支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には使い慣れた小物を自宅より持ってきていただくよう依頼している。必要時には、本人の意向をお聞きし、配置を変えるなど居心地よく過ごせるように支援している。	居室訪問は控え未確認であったが、職員が用意してくれた写真を拝見し、それぞれ好みのものを持ち込んで自分らしい居室づくりになっている様子が伺える。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	必要などところに手すりを設置し、見守り移動ができるようにしている。居室環境も利用者の身体状況に応じてベッドの高さや衣装ケースなどを利用者と相談して設置し、自立した生活を送れるよう工夫している。		